

人郷夢

ストーリー

Vol.4

このコーナーでは、まちづくりなどの活動に取り組んでいる市民の方やグループにお話を伺い、活動内容や活動にかかる思いをシリーズで紹介し

ます。
常葉町グリーンツーリズム「ときめき山学校」では、自然と遊び、自然から学び、自然とともに生きることをテーマに、都市の人々との交流を実践しています。その中心となって活躍されている「ときめき山学校」会長の奥山一美さんにお話を伺いました。

グリーンツーリズムでまちづくり

「山学校」とは、森林の中で教育をするとか、情操を育むことではありません。団塊の世代の「達人」たちが、子ども達の頃、小学校への登下校の途中で、あるいは学校をサボって、雑木林や川で遊んだり、昼寝をしたり、弁当を食べたり、学校が終わった時間を見計らって行っていたあの「山学校」

のことです。

「山学校」の活動を支えている「達人」の面々は、実に個性豊かで、行動力に満ちています。

平成13年、常葉町（当時）は、交流人口の拡大によって町を活性化させるため、「グリーンツーリズム」の実践者を募りました。「グリーンツーリズム」と

ときめき山学校…自然の中で役立つ特技を持つ“達人”とともに、農業体験、自然体験、田舎料理体験、宿泊体験を味わうことができる。具体的には、田植えと山菜採り（5月）、夏野菜収穫（7月）、稲刈り（9月）、収穫祭（11月）など。

また、「田んぼのオーナー制度」は、1区画30坪の田んぼを年会費1万円で貸し出し、米30kgを収穫していただいている。現在は15人が利用している。

という言葉は、当時から耳にしていました。「山漁村地域において、自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と紹介される

都市との交流によって活性化

本格的に活動を開始した平成14年には、春、夏と秋にイベントを開催しました。それぞれ約30人の「生徒」（＝参加者）が集まり、順調なスタートを切ることができました。

しかし、この交流を一時的なイベントで終わらせるのは、あまりにもつたいないと思います。参加者には、自分の田舎に里帰りする気持ちで何度も足を運んでもらい、集まった参加者同士もまた、親戚に会う気持ち

休止から再開、さらなる活動へ

震災と原発事故による影響で、平成23年はやむなく活動を休止しました。

田んぼオーナーに活動中止と年会費返金の連絡をしたところ、横浜市在住のオーナーから返金を断られ、「ときめき山学校をやめないで」という手紙が届きました。その時はうれしくて涙がこぼれました。

と考え、平成15年に「田んぼのオーナー制度」をスタートさせました。
10年以上参加している「上級生」（＝リピーター）や、毎年新たな「新入生」（＝初参加者）も加わり、「達人」とともに里山での交流を楽しむため、年に4回のイベントのたびに「里帰り」しています。
豊かな里山にある「山学校」では、都会で暮らす人々との交流を互いに楽しみながら、「生徒」をお迎えしています。

その後、平成24年には、田んぼオーナーの協力により、ピザ窯を手作りで製作。今年は、市のご当地キャラクター「カブトン」を題材に田んぼアートにも挑戦しました。市が主催するグリーンツーリズムのワークショップにも参加しています。

取材を終えて

震災の時には、「これで終わりだ」と思ったという奥山さん。「ときめき山学校」を再開へと導いたのは、何より都会に住む「生徒」の声でした。

山菜採りや川遊びができないなど、いまだ影響は残っていますが、奥山さんは「田んぼアートなど、みんながアイデアを出し合いながら続けていきたい」と語りました。

「達人」たちの挑戦は今後も続いていきます。

（協働まちづくり課・農林課）



▲稲刈りにて



▲カブトンの田んぼアート



▲夏野菜収穫体験の様子